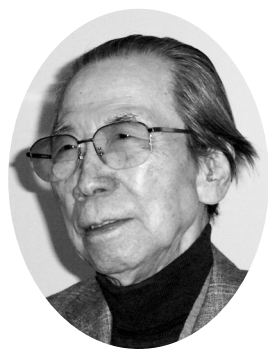


《公開講演会記録》

新春展望

— 戦後日本の出発点を憶う

元駐中国大使 中江 要介



毎年、新年に「三金会」という昔の勉強会の流れを継ぐこの会で話をしていきます。新年が近づくと、「新しい年になるとどうなるのだろう」と普通は考えるわけですが、今年は特別です。皆さんも同じでしょうが、去年は3月11日の大地震、津波、福島原発事故の後、様々な出来事が重なりました。政府も何をどうしたらいいのか分からないうちに日々が過ぎてしまったのではないのでしょうか。そのような感じを受けます。

今年は戦後日本の出発点に戻ったくらいのもりで、新しい年を迎えるのがいけないのでは、と私は思います。

私は当時学徒兵で、戦争に駆り出されてしまったので、政治的なことは考え

余裕はなかったのですが、生まれ故郷に帰り、どのように生きていったらいいかと考えました。しかし、何をやらなければいけないか分からない、日本国中がぼろ負けに負けてめちゃくちゃになっていたわけですから。それをどういうふうに受け止めて、どのように新しい日本を築いていくのかというところまで考えた人はあまりいなかったと思います。

私自身もこれから新しい日本の中で仕事をするとしたら、どんな仕事をしたらいいか考えましたが、その中身はというと、何のことはない、戦争も終わり、大学も終わった。そこでいろいろな試験を受けて、今でいう就活ですか、就職活動のようなものをやって、それぞれ自分の歩む道を模索したわけです。

私自身は何の抛り所もなかったので、先輩、後輩を含めて若い我々は戦後の日本でどうしたらいいのだろうと、何となく気にはなっていました。具体的なことは考えてなかったんです。

当時、私は大阪にいました。すると大阪の朝日会館の劇場で、日本の劇団（新劇）の舞台が東京からやってきました。当時は新劇は無料だったんです。タダで見られるならうれいとい見にいきました。確かヨーロッパの翻訳劇でして、見て思ったことは、それまで見た芝居と比べて、すごく迫力がある。何が迫力だったかという、演じている話が新しく、面白というよりも、演じている役者たちがものすごく真面目に一生懸命に舞台上で演じている。その迫力が客席のほうに響い

てきて、何か心が火傷をしたように感動したことを覚えてます。舞台が終わった後、その場所で舞台の反省会がありました。それにも参加して、隅っこのほうで聞いていました。

その時、話をしたのが、村山知義さんでした。新協劇団の中心的な人物でしたが、その人が開口一番「今の日本の若者は非常にだらしない。こんな日本の若者でどうして戦後の日本は立ち直るんだ」というようなことをボロクソに言うんです。私は非常に意外でした。

学生だったのに戦争にとられて軍隊に行き、意味のないことでした。ま絞られて、天皇陛下のためにと、めちゃくちゃなことをさせられて、それにもぐっと我慢をし、戦争が終わり、無条件降伏するのだということになり、これからどうするかということに、日本の為政者は考える方も覚悟も何もなくて、ただいいかげんなことをやっている。国民はというと考える余裕もない、食べるもの着るものに不自由して、非常にみじめな哀れな姿で毎日を過ごしていました。

私は軍隊時代に手に入れた軍服をかっいで、物々交換して、食べ物を手に入れました。最後は和歌山県に駐屯していましたが、和歌山に行つて、外套やら靴

やらを米などに交換しました。食べ物と交換して、汽車に乗って兵庫県の尼崎に帰り、外地から引き揚げてきた家族と一緒に、食いつなぐという生活でした。

そういうときに、村山知義氏が偉そうに「日本の若者はだめだ」と言ったので、私は非常に憤りを感じました。我々は、他に生きる道もないままに、軍隊に引張っていかれ、毎日毎日、教練で戦争の真似を続ける。そういうことをしていたわけです。それで得た結論は何かというと、新しい日本をつくる若い日本人は、まだ何もできない、まとまっていけない、どういうふうにも国をつくっていくのかはつきりしない、ということでした。

そして、そのとき自分が考えたのは、一番よくなかったのは戦争をしたことだ。だから、二度と戦争だけは受け入れてはならないと、いわゆる反戦、平和主義に徹しよう。

なら何をすればいいのか。国家公務員になって国のために、というか国の平和のために働く、そういう道を選ぶことはできるかもしれない。それを選ぶにはどうすればいいのかというので、国家公務員の中の、一番平和のために働くことのできる公務員はどこだろうと考えました。そしてそれは外交ではないか、外交が平

和を築き、平和を保ち、平和を守っていくために一番大事な公務員ではないかと思いました。

それで試験を受けました。兄に受かるわけがないと言われ、おまけに試験当日、靴の紐が切れて、兄は受からない証拠だとばかりにしましたが、受かりました。

高等文官試験の合格発表は東京でありました。試験の成績も発表され、悪い方ではなかったもので、外交官になるんだと一貫した思いから外務省に入りました。外務省に行った時、中学の同級生がすでに2人いました。2人は「お前それで、外務省にコネがあるのか？」と聞くので、「ない」と答えたら、彼らは「コネがないや無理だろうな」というので、こいつらは不潔なやつらだと思いました。

そこで日本の戦後処理の話です。日本の政治家というのは、たいしたことがないですね。顧みると石橋湛山という政治家は戦後の日本についての一つの理念というか、信念があったと思いますが、早くに亡くなりました。戦後の日本を、責任をもってつくっていくと仕事をした人はあまりいませんね。そういう中であつて、日本の外交は戦後処理にしばらくは忙殺されました。その忙殺した戦後処理

の外務省の最大の相手方はどこかということ、日本を負かした国々でした。

戦後処理の根幹は、ポツダム宣言です。しかし当時はポツダム宣言など見向きも、考えもしませんでした。新しい世界が生まれてくるなら、新しい日本もつくっていいという時期がありました。ポツダム宣言以降、日本がいろいろな国との間で、戦後の処理をする、負けた国に賠償を払うとか、占領地を返すとか、領土問題、賠償問題、日本の近くでいえば朝鮮半島における従軍「慰安婦」問題とか、戦争中の強制労働のしこりだとか、いろいろな問題が残っていたのです。

それを片っ端から外務省で戦後処理の仕事をしていった中で、今まで、ただ1国だけ残っている国があります。他の国は賠償協定があったり、平和条約を締結したり、いろいろな形で戦後の処理をしたのですが、1国だけ、何もしないでほったらかしにしている。正しく言うところです。1つはソ連、今のロシア。1956年の日ソ共同宣言で、平和条約を結ぶと約束したのですが、平和条約はご承知の通り結ばれていません。だから日ソ（ロ）関係というのは戦後処理が終わっていないんです。

もう1つは、戦後処理どころではない、

ポツダム宣言にもはっきり書かれているんですが、朝鮮問題は日本は正しく処理しなければいけないのです。そのことを私は前に新聞にも書きました。一口でいえば日朝正常化をしろということですよ。

カイロ宣言では、「朝鮮を自由かつ独立のものたらしむるの決意を有す」、つまりポツダム宣言のメンバーであるアメリカ、イギリス、中国、遅れてソ連、この国たちは、カイロ宣言で、朝鮮を自由独立のものにしようと言っている。それでサンフランシスコ条約では、ポツダム宣言第8項を受諾、朝鮮の独立を承認して、朝鮮に対してのすべての権利、権限、請求権を放棄するということまで言っているにもかかわらず、今まで、北朝鮮との正常化の話は何にもしてないんです。これを個人的に私は、機会あるごとにいろいろなところで訴えるんですが、誰も心に留めないんです。

北朝鮮というのは、日本人を拉致しているとか、人権を無視しているとかで、こういう国はよくないとか言う。あるいはミサイルをぶっ放して、物騒なことをやっている。こんな国は、日本が正常化するような行儀のいい国ではないと言おう。そして、北朝鮮を頭から無視する、批判する。これはブッシュと同じです。これ

は悪い国だと、そういう印象を持たされている。なぜ日本は北朝鮮をそこまで悪者にしなくてはならないのかということについて、なるほどと思う解説というか、説明を聞いたことがないのです。

本日配布した新聞の私の文章の最後では、「冷戦の終わったいま、わが国は『原点』に立ち戻って、速やかに北朝鮮を承認し、いわゆる『日帝三十六年の統治』は朝鮮半島全域の問題であるから、韓国に対してと同様北朝鮮に対しても、植民地支配の謝罪と補償の問題を解決し、善隣友好関係を結ぶべし」と書きました。

そのことは普通ならすぐに分かるはずなのに、現在までそのままです。当時、北朝鮮の金容淳労働党書記は米CNNテレビで、「ケーキを持って訪ねて来るなら、われわれもケーキを差し出す。刀を持って来るなら、刀で対抗する」という言い方をしています。「お前たちが武器を持ってくるならわれわれも武器を用意しておく」。先方はそういう態度でいるのですが、日本は拉致の問題ばかりをあげつらって、悪い国というのを印象付けて、日朝正常化が進んでいない。

新聞にも書きましたが、外交こそが国防の第一線です。日本は戦後処理で北朝鮮と正常化する努力をしなければなら

い。それが原点の1つです。

もう1つ戦後処理で問題なのは、台湾の問題です。日中正常化にもなっていて、台湾のことは捨て去った、あんなもの（日華平和条約）は用がない、存在の理由を失ったとして見捨てた。それが日本の政府の立場です。どういうふうに見捨てたかというと、大平外務大臣が、日中国交正常化の当日、北京で外相談話を発表して、これで日華平和条約はなくなった、あの条約は根拠を失ったと言ったのです。

日華平和条約というのは、有効に、日本国憲法に従って締結し、国連の事務局にも登録している立派な条約であるにもかかわらず、それを一口であれはもうおしまい、と言っておしまいにしてしまったんです。

これは間違っているのではないかと、私は今でも機会あるごとに言うんですが、「そうだね、あれはおかしいね」と言う人はほとんどいません。なぜいけないかという、皆、中国ばかり見ているからです。台湾のことはいつのまにか忘れてたんですね。日本人は、どんな事でもぼーんと忘れる、いいかげんなところがあると思います。もっと念入りに、どういうふうにして、どういう手続きでどの国とど

んな条約を結ぶか、その有効期間は何年で、その効力を失うのはどういう手続きになるか、つまり条約の生い立ちとか、成り立ちとか、そういうものについてほとんどしっかり勉強しません。なぜ勉強しないかという、北京のことばかりしか見ていないからです。

「米国は台湾を放棄すべきか」という文章が、去年の秋、アメリカの雑誌に出ました。結論はアメリカは台湾を放棄すべきでないというのですが、こういう論文が出るような時代になってきた。その理由は、中国がしっかりしてきたからです。軍事力はもちろんですが、経済力もそうだし、政治力もやがてそうでしょう。だから、中国が、政治的にも経済的にも軍事的にも、力を持つようになればなるほど、アメリカは台湾のことは捨ててもいいのではないかと思う人が増えてきていると思います。

今は地球上あらゆるところで、力関係が乱れ始めたという、変化し始めています。今年、台湾に始まってロシア、フランス、中国、アメリカ、韓国など、各国で大統領選挙などがあります。どうなるのでしょうか。

ところで、原子力発電の問題についてですが、日本は資源も少ないし、エネル

ギーも不足しているし、「だから原子力発電こそ日本を救う」と原発を大いに推進してきたのは自民党です。岸信介、中曽根康弘とか原子力屋さんがいるんです。それらが大きな顔をして「原子力、原子力」といってやってきて、結局、今度の事故です。原子力の間違いのものをくったのは自民党です。

にもかかわらず、弁護することもなく、何もしないで知らん顔をしている。国内政治のだらしなさははっきりさせていると思います。ここにはジャーナリズムに携わっている方も多くいますが、ジャーナリズムは問題にもしていません。おかしいと思います。来年の正月は、こうしたぼやきをしなくてすむ世の中になるように期待したいものです。

(1月20日・アジア研究懇話会)

講師略歴(なかえ ようすけ)

1922年 大阪市生まれ 京都大学 卒業

1947年 外務省入省 アジア局長

1984年 駐中国大使

退官後 原子力委員会委員

著書『日中外交の証言』『中国の行方』
「霞光」のペンネームでバレーエ台本多数